



永平寺仏前齋粥供養侍僧事／紙本墨書／縦 31.2×横 48.0 cm／（原本：寛元 4 年〈1246〉）

寛元 4 年（1246）6 月 15 日、道元禪師は吉祥山大仏寺を、吉祥山永平寺と寺号を改称する。本書はその翌月に記されたものである。本書では、永平寺仏殿の本尊に齋粥を供える当番として、懷奘（1198～1280）と覚仏の 2 名が交代でつとめ、供養をすることが定められている。齋粥とは禪寺の正食である齋（昼の飯食）と粥（朝の粥）を指している。懷奘はのちの永平寺 2 世である。覚仏は、「覚」という系字をもつことから、日本達磨宗の覚晏の門下であったことも推定されている。また、覚仏を『護国正法義』を著した道元禪師の弟子覚住坊という理解にたって、覚仏と覚住坊は同一人物であったとする可能性も提示されている。本書の筆跡は、懷奘が代筆したものとする説があるが、懷奘の確実な筆跡との類似性は見いだせない。本書の筆跡は「庫院須知」とも類似している。筆勢は全体的に弱く、正文とは判断できない。しかし、本書の「道玄」とする署名や花押の形は、他の道元禪師の史料と比較して不自然ということはない。内容自体も問題はない。したがって、本書は道元禪師の筆跡ではないが、原本を忠実に臨書したものと考えられる。